公事根源集釋

下

ワ 3
7083
3

○神祇令云季夏鎮火祭季冬鎮火祭義解謂在宮城四方外角卜部等鎮火而祭爲防火災故曰鎮火○儀式詳也○延喜式有鎮火祭祝詞

○神祇令云季夏道饗祭季冬道饗祭義解謂卜部等於京城四隅道上而祭之言欲令鬼魅自外來者不敢入京師故預迎於路而饗遏也○疫癘流布時被行四角四境鬼氣祭對治見東鑑二十六

京城四角　宮城四角四堺　和泉堺　會坂堺　大枝堺　山崎堺四所ノ鬼氣ヲ祭爲ニ

卜部氏乃人共とうらく文城乃ほの
とりて家車乃共笑乃四方うん
ぬたくとうやぬ紫待乃わひく秘納お
同くゆうしゆ永ほなら

道饗祭　同日

毛い疫神乃家なら毎年ふ必ゆうら
四方乃年ゆ毛ぬ待くゆうや毛毛と
部乃人京城乃四角ゆ路りて鬼魅ゆ他
方とり寄とうと京ほよへ年ぬめん

能勢文庫
京都帝国大学
〈2000-441〉

陰陽寮ノ人ニシテ此四角
四堺ヲ遣ハサルヽ也朝野
羣載第十五ニアリ

施米 ○西宮記九条殿
年中行事ニ云東手於愛
宕寺ニ給之北手於右近
馬場給之西手於右兵
衛馬場給之云又人數
并米鹽文二枚官勘作
之

百七

施米

東山西山ハ
如法ナリキ法師原ハ米酒ヲ施ス
使
事ナリ上卿陣ハ法ヲ人勘ノ
勘文ヲ奏ス六月賑給六月施米ハ
孤貧窮孤獨ノ人ハ米ヲ給ス也
アリ事ハ

○月令仲春之月是月
也日夜分雷乃發聲仲
秋之月是月也日夜分
雷始收聲

西宮抄六

月 雷鳴陣 大嘗三
度以上 秋節依宣旨立
補度 昌泰三七一日
立 大將以下帶弓箭
候御前孫庇額間左右
兵衛立南庭敷雷鳴御
座鳴盛時分陣遣后殿
外衛督佐候殿上者帶
弓箭候簾中解陣
御殿孫庇 海人藻芥云
清涼殿ノ孫庇ト申ハ檜皮
葺ノ庇ノ外ニ又板庇ヲサシ

雷鳴陣

此事あるハ年中行事ハ入行事也
月令ハ文ハ春ハ雷ハ鳴ハ夏
ハ雷ハ鳴ハ秋ハ雷ハ鳴ハ冬
ハ雷ハ鳴ハ
ハ夏ハ
ハ
ハ六月
ハ雷鳴ハ陣ハ者
雷ハ鳴ハ陣ハ

万檜皮葺ニ時雨ノ音聞エテ子ハ板庇ヲサシテ時雨音ヲ聞名ントノ為也

麗芳舎

○倭名鈔十襲芳舎在凝華舎北加美奈利乃豆保ヒ霹靂俗謂之雷鳴壺

延喜ノ御宇

○倭名鈔霹靂辟歷二反俗云加美於豆一云加美止介霹靂折也靂歷也所歷皆破折也

○扶桑略記云醍醐天皇延喜八年五月廿六日戊午午三刻從愛宕山上黑雲起急有隱澤俄而雷聲大鳴隨清涼殿埼第一柱上有霹靂

神火侍殿上著大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣清貫衣燒胸裂天亡年六十四又從四位下行右中辨兼内藏頭平朝臣希世燒顏而臥又登紫宸殿者石兵衛佐忠包髮燒死亡紀蔭連腹燔閉亂安臺宗仁膝燒而臥民部卿朝臣載半部至陽明門外載車希世朝臣載半部至修明門外載車時兩家之人悉亂入侍衆泣之聲禁止不休自是天皇不豫

高辛氏ノ小子

此故事十節記出ル

竿を篠乃次將まてら前と等ちく
御殿乃孫庇小作して御門成ち獲
奉つらなりわ豆ら乃下いれ袋ゆと
志ておの〻皇南殿乃前ハ遊ゆさ
姫光を雷鳴乃陣ゆいと大内裏芳
舎を雷鳴乃法かとゆとゆく雷れ雲と
ゆれい文陣をとゆく成式あり延喜れ
御宇小清涼殿ゆ霹靂とてなう成
しきためしとゆら成ゆ

七月

廣澤彩國畫

四月小なかつ〇てゆとゆとゆなわと

卓七月御ゆ

内膳司ら光成綱をとをもゆとくべい
と用事ゆへゆら事ゆわひりら幸
氏乃小子七月七日小死ゆら雲鬼と
なりて人小瘧病といふ成ゆ日ま
表餅をこゆ〻ゆへゆ索餅と
りて光なまり年中ハ瘧病成
のそくといへと

○江次第云朱漆高机
四脚立筵上

○江次第云自御所神
下等一張置東北西北
等机上北妻延喜十五
年例用

桂三様

○裏書云立桂有三様
常用半呂半律秋調子
也

○六百番歌合顯昭歌
サタメヲク星合ノ空ノレル
シトテ秋ノシラベニコトチク
ツ也

乞巧奠　七日　江次第八

乞七日なれいの義人沙てうぢ紙ひ
拭取小くく乞巧奠あり御殿乃庭
清涼殿也
ぢく忌ぢまくとゝて灯臺の上紙
黒漆ノ
ぢく所あり机乃上ふるゝ机はとへあ
つ琴れことゝもちとゝて乞とゝく
ぢく忌乃上次ぢ取をすゝ
たあるあり角ひふるとへくゝ
桂
れ星とゝつもゝ世ふ乃様あり
徐い琴しき調半調子律あきれ

調八月ノ律也唐
管絃音義云盤涉調水音
盤所以名盤涉調者一
切江河必有迴曲流入
於海故水音名盤涉也
半呂半律或樂書云黄
鍾調大食調律呂之調
也半律調也

烏鵲　額府烏鵲填河
成橋渡織女淮南淮南
子漢淮南王劉安作二
十一卷ノ今淮南子ニ
此事ナシ
續齊諧記異均作也

尋へなり乞ゝ秘事ゝて伝ち有ふるる
人ゝ乞ゝなし鵲橋のとゝ乞ゝ行ふる
諒闇時猶祭八月廿日内裏穢時猶祭應和二
天平勝寶七年ふゝ乞ゝ海ふ行ふ
ゝふい豪半穢女ゝ行乃りれあひ
如織ゝ烏鵲乃河ふ渡れ行ふ乞ゝ
ゝさとのべ橋ゝる乞て穢女ゝ行ふ
ゝ淮南子ゝ書ふみゝ乃又續
所諧記ふ云桂陽城乃武丁ゝ乃ひ人
他道ゝ乞ゝ行ふ乞ゝふゝて行ゝ青
七日ふ穢女河ゝ乞ゝる事ゝ書ゝ

郝隆腹中

○蒙求上世說郝隆七月七日出日中仰臥問其故曰我曬腹中書也

阮咸 ○晝言故事十卷竹林七賢傳七月七日諸阮庭中鋪陳莫非錦繡咸時總角乃挈長竿標大布犢鼻於庭中曰未能免俗聊復爾耳

泰善元興寺僧也○天長五年二月廿五日太政官符應修文殊會事右得僧網牒偁贈僧正傳燈大法師位勤操元興寺傳燈大法師位泰善等識內郡邑廣設伎會解餘食等施給貧者此則依文殊涅槃經云若有衆生聞文殊師利名除却千二億劫生死之罪若禮拜供養者生生之處恒生諸佛家爲文殊師利威神所護若欲供養修福業者即化身作貧窮孤獨苦惱衆生至行者前也而今勤操遷化泰善獨在相尋欲行增感不已望請下符京畿七道諸國同修伎會須國司講讀師仰所部郡司及定額寺三綱等郡別於一村邑屈精進練行法師以爲教主每年七月八日令修其事云中納言兼左近衛大將從三位行民部卿清原真人夏野宣奉勅依請云

百十二

文殊會 八月

足い東寺西寺にて行はるる仁和寺天長十年七月小大法師泰善等、めく文殊會を行ふ始る七月小此事あるへき由格小さ宣旨

百十三

盂蘭盆 十四日

内蔵寮御盆供を持ち小畫師座北南端に小菅名座一枚を敷く上宣旨

天平五年 ○續日本紀云聖武皇帝天平五年秋七月庚午始令大膳職備盂蘭盆供養

盂蘭盆 釋氏要覽下卷梵語盂蘭此云救倒懸也

○翻譯名義云盆是此方貯食之器三藏云盆羅百味式貢三尊仰大衆之恩光救倒懸之窘急

翻譯 翻譯名義集一翻譯者謂翻梵天之語轉成漢地之言音雖似別義則大同宋僧傳云如翻錦繡背面俱華但左右不同耳譯之言易也謂以所有易其所無故以此方之經而顯彼土之法

御祈願 ○天平六年七月

○盂蘭盆經云於七月十五日佛歡喜日僧自恣日以百味飲食安盂蘭盆中施十方自恣僧云疏自恣者自己之過恣他所舉又自恣事釋氏要覽下卷詳也

○六神通 天眼 天耳 他心 神境 宿命 漏盡

○雲屬抄相撲節ヨリ

供御人 相撲ノ奉仕人 則諸國ノ防人也

○日本紀齊明天皇二年七月作須彌山像於飛鳥寺西且設盂蘭盆會

○百古 相撲 江次第八仁壽殿東庭相撲トアリ裏書ニ云南殿無出御之時於仁壽殿有召合抜出之義

公事根源下

○先一三月比大將以下於陣座定相撲使事關白大將隨身陣官賭弓矢數者等爲使遣諸國七道召相撲人也万葉ニコトリツカヒト云也
○コトリハ部領ト書万葉集二十相摸國防人部領使駿河國防人部領使類大伴家持進痛防人悲別之心作歌麻須良男能由伎等里於比且伊田且伊氣婆和可礼乎乎之美奈氣枝家牟都麻
○江次第云勝方乱聲依負左勝者後頭右勝者納蘇利均共奏往年最勝左奏先右勝方亦有納蘇利左最勝者奏陵王右奏抜頭云云

事なり先十六七日ほとに左右の仰られて御勅を奉て左右の次将に相撲あるへきよしをめしたまふなり左右の近衛諸方をわかちて国々へ使をくたして相撲をめしのほせ萬葉にもよめる使とかや廿六日に内取といふ事あり主上仁寿殿

江次第裏書云大月廿六日小月廿五日於仁壽殿東庭行之御物忌時於清涼殿有之近年申御物忌時義云内取之習礼也故左與左右與右相撲也

にて御らんする左右の相撲人犢鼻はかりに

東庭ニテ相撲十五番畢若有故障隨仰進止
延久三年江記云相撲人三十人次第行列其裝束烏帽狩衣犢鼻褌也差細狩衣上著帶不著下衣袴從跣左右各三十人也

[illegible]

○相撲抜出裏書云昨日相撲人中抜出之今取相撲也
○扶桑略記云相撲事 宇多天皇紀
從柏原天皇御代至今代代天皇皆盡好之貞觀以後寂然無事今聖主不捨之亦不絶乎
○又延喜元年七月廿八日丁丑御覽童相撲廿番於綾綺殿有此事

勝負ありけり廿八日に天皇南殿に

裏書云召合抜出者左右相撲相合也
大月廿八九日小月廿七八日

出御ありて先左右の大将相撲の奏をと

江次第云取奏之儀寛仁二年有論二條大閤白先挿笏次取奏文見之次挿次將所持杖後取實大臣見文畢之後取將所持杖自挿文云挿笏取文式左腋挿笏見文
白着者不必究叡止之云云

らる十七番とりて勝の方乱声あるなり廿九日に抜出とて相撲をとらせて御覧せらるゝ也神亀三年にはしめて諸国よりえらひの力ある者を奉る寛平七年には童相撲と御覧ありなとそ相撲はむかしの日本紀に垂仁天皇七年七月に當麻のけはやといふ勇士ありけ

[illegible]麻乃蹶速といふものありけり
角あそびをしけり天皇ほめたまふ
[illegible]
[illegible]
おのくあり野見宿禰[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
言我朝相撲之始也

大極殿
○仁王會懸五大力菩
薩像一鋪行之

百十五 祈年穀奉幣
[illegible]年穀をいのるなり[illegible]二社小幣
[illegible]二月と七月とこれ
[illegible]事いとをかし
[illegible]

百十六 仁王會
法第二秋季[illegible]

[illegible]も春乃原小[illegible]
八月

百十七 八朔風俗
[illegible]法事いとをかし[illegible]又正[illegible]

建長ノ比ヨリ此事有

○桃華蘂葉ハ冊ノ事正應二年御記ニ云今日家家乃つとなとかふてさた人のかたらひてまつる事をしまりてそちにもおほうにまれなるにと申けは就此御記勘之後深草院御代建長乃比より此事かはりける也宗尊親王乃時代なるへし

通方卿 ○錺鈔 臨時公事衣抄 雜衣抄 羽林籠鶴抄 本朝台車礼 仁王會抄等皆通方卿ノ御抄也應仁已來兵亂紛失今錺鈔纔ニ存ス

其後ワヅカニ聖運ヲヒラカセ給 ○古今著聞集ハ八ニ云第八十七代皇帝後嵯峨天皇ト申スハ土御門天皇第三皇子也父ノ御門寛喜三年遠所ニテ崩御事アリシ後御メノト大納言通方卿モトニカスカナル御スマヒニテワタラセ給ヘハ御位ノ一ヲホシメシモヨラス大納言サヘ身マカリヒハ仁治二年ノ冬ノ比八幡ヘイラセ給テ御出家ノ御イトマ申サセ給ケルニ曉御寶殿ノ内ニ徳是北辰椿葉影再改ト鈴ノ聲ヤウニテ一サシク聞ヘサセ給ケレハ是コソ示現ナラメトウレシクヲホシメシテ還御アリケリモトノ通成中將ノ亭ヘハ入ラセ給ハデ御祖母承明門院ノ土御門ノ御所ヘイラセ給テ其年モ

あるひは醫國世治乃風儀なれば或假名記
に建長乃比より此式事をはじめ給ひぬ
ことさらに其數のみはあまたに人
人法をしれる人まれなるやもと為
此等太閤は文和乃頃に七八年がほどに（一條殿實經公也）（在山崎）
あつめて天下小流布せしめ
ありしかは小建長乃比よりの事
成典も或説を以後深艸院にまうす（土御門院第二子母贈皇后通子贈大臣通宗女）
なりて外戚通方卿乃亭にて産あり（土御門大納言）
時御閑素にはすくさせぬれとも

手習乃男女審らかなる事のみ後のみぎ
に聖運をひらかせ給ひしの御嘉瑞なれ
とて同御ことわりあるなりとも絶へ
たりうきまも哀いつまても忘れさる事
をしき哀実りまうさる年號
おはしますは後嵯峨院乃御治
世乃時よりの事成りぬるもの
今度中納事乃中にしも小家
事諱すといへども心躰に至まさりに（諱字彙擇言也）
ならはそふ事をもれは其次を

クニケリ同三年正月九日
條天皇十二歳禁中ニテ崩
御事ハ由くしりケレ後堀
川院御方ニハ御位ニツカセ
給キ宮モヲハシマサス定テ
位度院ノ宮タチノ踐祚ア
ランスラントテ聞ヱキメケレ
ケレ時ノ卿相雲客四
辻修明門院ニイリヲ
トイハントモ天照大神御ハ
カラヒニヤ侍ケン同十九日関
東ヨリ城介義景早打ノ
ホリテモノカニ承明門院ニ
イリヲ御位阿波院宮ト
ヲタ申侍也公家ハカ御
ホコロビモ侍ヲヒ申ヲカテ法
性寺殿一条大相國モ
申ケ下リヌ云三月七日御
年十三ヲ太政官廳ニテ御
即位アリ

○天神事大鏡扶桑略
記愚管抄北野縁起等
詳也

作り絶ぬ御ゆ
ゑ
ゆくすゑ
ゆくすゑ
きたなり

上丁日

春二月ふかなる

百九 北野祭 四日

小野ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
延喜聖ノ御門ハ右大臣従二位菅原朝臣
ゆ
ゆ
ゆ
従三位藤善卿ト申ケル菅原四子宮

女宮ハ大臣時平ノ公ノ御言ヲシテ左遷
御ヲ
しき女七日ヲ
二月女宮配所ヲ
ゆ
下
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
延喜女三ノ四月女日ヲ又宣命ヲ下
ゆ

四年の宣命をはじめとして歴代の二階元
年七月小流宮あらて右近の馬場小路
を斎宮とのよりの条い一条院の御時より
のち官幣帯なく祇園ふるす

十一日

定考

先い昔六位のよりの加階をとらん人いかの芸
能の孫恪勤をえらひ栄爵を給きら
なりと官の東は廳の座ふつゆく事
と行幸次小幡取小御三献の儀式あり
次小宴終て殿上侍く文おけく三献を

○日本紀三十
上日
○承令云良八月至正
月上日一百二十日以
上者給春夏禄

うちの義とうたの竿は冠よりたかい
白菊云い黄菊参議つまりたんをみ
ゆ之和時の義ふ式とうたあ
すたうい二月の別勅小同一式をあ
宿より法司の案の上日を選成とる事
と引見といよそれをうきありのり奏
とる儀擬階の奏といよ此人をえらひ
おしてうの作ると定考とは上也定考
しく文字はうきく作まて考定さ
うの南よりん作の口作して作るの選

胎中天皇 ○日本紀十七住吉ノ神初以海表金銀之國高麗百濟新羅任那等授胎中譽田天皇 此胎中ハ仲哀天皇時住吉神海表國ヲ征タマヘト勸タマヘトモ仲哀天皇信ジタマハズ神ノタマヘルハサラハ汝ハ其國ヲ得タマハジ今神功皇后ハラミ玉ヘリ其子エタマフベシトアリシ事ニヨリテ胎中ノ号アリ

譽田天皇 ○譽田ハ昔射時ホムテ手ニ鞆ト云物ヲ掛ル母后三韓御退治ノ時鞆ヲ負タマヘリシニ似タマヘル御誕生ノ時左ノ御手ニ鞆ノ如ナル瘤生シタマヘリ仍テホムタノ天皇申シタテマツル譽田ハ鞆ノ假名也日本紀ヲ考ヘシ

叙令（チヨリヤウ）小なりしき事ハの坊ちら其儀しき
なとい次オ小みしらち十二月にいまつ小宮（コカウ）
考（ギヤウ）として大辨以下乃人集乃庭小ゑく
（江家ノし也）（官ノし也）
行ハ事なり

○去年八幡宮神躰……（朱書、判読困難）

内裏にていくしおすら事也 百王二 石清水放生會 十五日 なしよつ宰相
辨ふ出府ありおかしく山小出むし宮命内
前察使小たまふ於八幡大菩薩とも
奉るは人王第十六代乃御門應神天皇
此御事なり仲哀天皇乃第四の皇子

○菱形池豊前國宇佐郡ニアリ○託宣集ニ菱形者三山之總名也北辰影向之地也峰形如菱之角三山者一ニ龜山在北方ニ似龜形ニ山ニ号小倉山ト二ニ大尾山在東ニ爲龜山尾ニ三ニ官山菱形耶小倉山之下津石根ニ宮柱太敷立是也○又云菱形ノ之稱斯ノ峰ノ之體如菱之角ノ非一山之秀ニ分テ三方ニ而崎ス於松林ノ之間ニ有自然ニ池隨山ノ總名之故稱ス菱形池ト

○紀貫之歌
豊國ノ菱ノ池ナル菱ノ根ヲトルトヤ人ノモカ袖ヌレニケリ

御母ハ神功皇后也胎中天皇とも又ハ譽（ホム）田（タ）
天皇とも申奉る天下をしろしめし
ぬ事四十一年百十一歳乃寶算（ホウサン）とた
もち給ふ欽明天皇乃御代小始てく神と
あらはれ給ふ（三十代）肥後國菱（ヒシ）形池（カタノイケ）といふ所小
（當作豊前國ニ）
跡を垂給ふ人王十六代譽（コン）田（タノ）八幡（ハチ）丸（ミコ）也
と託宣ありき譽田ハ御名八幡ハ御
跡乃号也又豊前國宇佐乃宮とも申ま
給ひし小聖武天皇東大寺建立乃時
迎給ふ也ときこえし託宣ありし威儀

得道來――御託宣ハ勝尾寺開成ニ告ゲ給フ御託宣也此ヨリ以來大菩薩号アリ桓武末ニアル

○日本紀欽明紀訓

○解脫ヤスラカニスカル

八正道○彌勒菩薩說瑜伽師地論卷第六十七攝決擇分中聲聞地之三

問何因緣故正語正業正命說爲戒蘊答二因緣故一依正受用法故二依正受用財故謂正語正業戒爲根本戒爲所依方能受用一切正法是故說名依受用法由正命故不依矯詐等起邪命法求衣服等此爲根本此爲依處正受用財是故說名依受用財又於是處世尊說爲增上淸淨意現行性此中依止貪等起犯戒思依止矯詐等起邪淫求衣服等思若離此事應知是名增上淸淨意現行性

問何因緣故正見正思惟正精進說爲慧蘊答由此慧蘊略有三種作業因此三法方得究竟謂通達諸法眞義是初業通達諸法眞義已即於眞義爲他宣說施設建立分別開示令其易了是第二業爲斷餘結法隨法行是第三業如是三業由正見正思惟正精進故如其次第而得究竟

問何因緣故正念正定說爲菩薩と申御名ハ御託宣小觀音遊戯不動法性示八正道寂滅得解脫若無生故号八幡大菩薩とあり八正ハ何與ハ

念見正思惟正語正業正命正精進正念正定

念見と八正道とハ大なる心正なるハ

平酉十二月二日夜見瑜伽論改 始念作惠

身口意

なりいかなること三業ハ邪なるとして因果なる紙法佛おもむく源なる神の密迹もこれ見ぬ

めぬ又ハ八方ハ八邪ハ八邪ハ八邪なる事

習合說也

あり

一本習作唱非也

菩薩方の法ハ三昧那邪

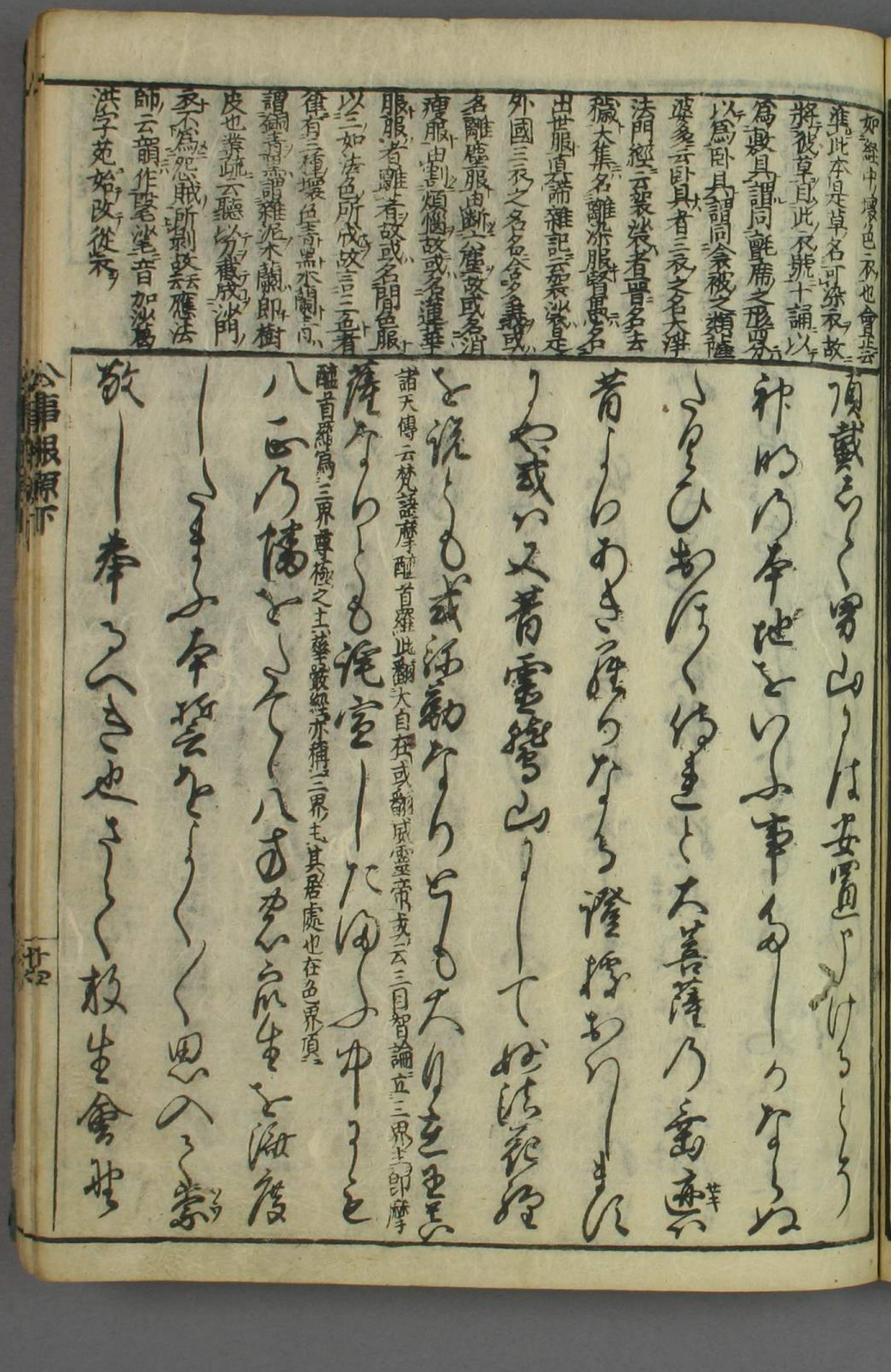
定蘊答ニ因縁故ニ一由自性故ニ一由所依故由自性者謂三摩地由所依者四因縁故念於此定能作所依一繫所縁故謂於四念住繫攝其心ニ一隨順定故謂由此念於守護根門正知而住順歡喜處隨念作意中能隨順定三能斷蓋故謂於各別不淨觀等諸蓋對治作意能斷諸蓋四極多修習相作意故謂遠離者於止舉捨相無問殷重加行中能多修習是故此念為定所依

八色幡○八色幡即應神天皇御正體幡神也幡軍陣大事物出陣時先幡ヲ祭ル古禮也

三昧耶形○空海四種曼荼羅義云且於畫造諸尊者以五大色畫作影像者大曼荼羅造所持カ劒蓮華等ノ三昧耶曼荼羅捏鑄刻等像者羯磨曼荼羅畫三十七尊等種子字者達摩曼荼羅○又云三昧耶曼荼羅所持禁戒是也○又云三昧耶平等類之義○三昧耶形ヲ略ス三形ト云 [餘陀三尊] 拾芥下本 古人翻檀新人翻輪圓具說 阿弥陀三尊觀音勢至 ○續古事談第四行教和尚一夏九旬宇佐宮籠テ書ハ大乘経ヲ讀夜ハ眞言ヲ誦シテ法樂トシテ三ツ九旬ナリシ時我王城ノ近邊ニ向テ國家ヲモリタテマツラントテ託宣アリケレハ是ヲ見セ七條袈裟ノ上字ニ非ス繪ニモ非ス阿彌陀三尊現ス〻ヘリ行教此御姿ヲウツシタテマツルサテ京ヘホリテ此由ヲ奏スル帝ノ御夢ニ男山ノ上ニ紫雲タチノホリテ王城ヲ覆ヒ御覽シキ此事ナレハ中ハ常ニカウハレキ香ニホヘリケリ

袈裟 上ニウツ在

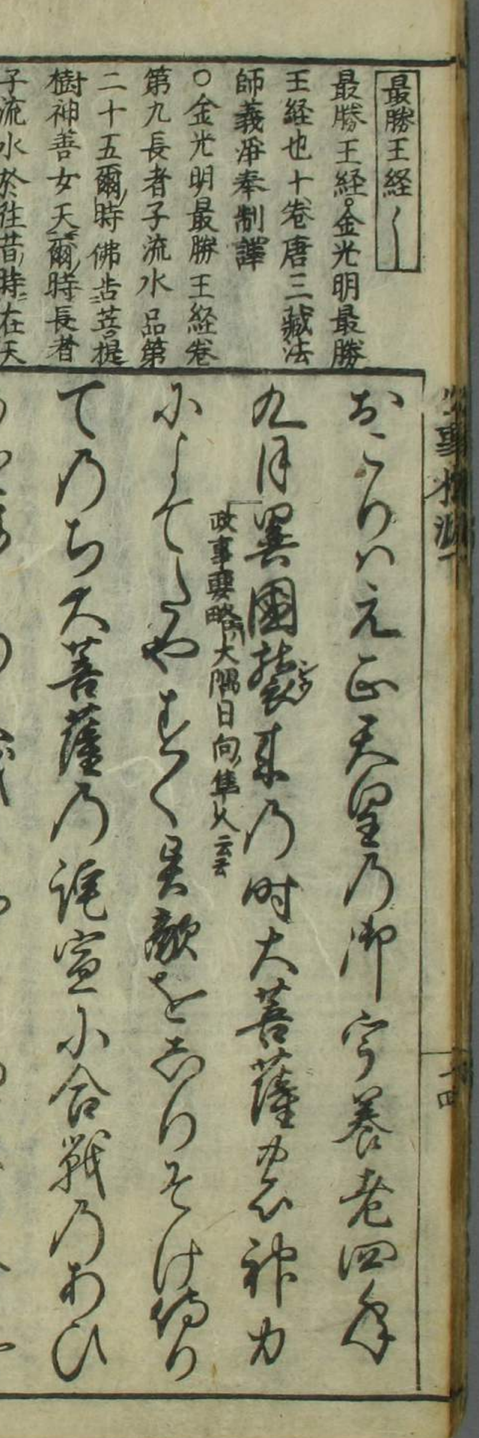
○翻譯名義集七袈裟具云迦羅沙曳此云不正色從色得名章服儀云袈裟之長因於衣色如經中壞色衣也會云濁此本是草名可染衣故將彼草目此衣號十誦以爲數具謂同壞爲之形分以爲臥具謂同衆被之類僧婆多云臥具者三衣之名大淨法門經云袈裟者晉名去穢大集名離染服智度名出世服眞諦雜記云袈裟是外國三衣之名名多義或名離塵服由斷塵故或名消煩惱服由割煩惱故或名蓮華服者離者故或名閒色服以三如法色所成故言三色者雜有三種壞色青黑木蘭間色謂鋼青黑謂雜泥木蘭即樹皮也業疏云聽坊截成衲衣不爲怨賊所剝故云應法師云韻作袈裟音加沙婆洪字苑始改從裟



最勝王経

最勝王経。金光明最勝王経也十卷唐三藏法師義淨奉制譯

○金光明最勝王経卷第九長者子流水品第二十五爾時佛告菩提樹神善女天爾時長者子流水於往昔時在天自在光王國內療諸衆生所有病苦令得平復受安隱樂時諸衆生以病除故多修福業廣行惠施以自歡娛即共往詣長者子所咸生尊敬作如是言善哉善哉大長者子善能滋長福德之事增益我等安隱壽命仁今實是大力醫王慈悲菩薩妙明醫藥善療衆生無量病苦如是稱歎周徧城邑善女天時長者子妻名水肩藏有其二子一名水滿二名水藏是時流水將其二子漸次遊行城邑聚落過空澤中深險之處見諸禽獸犬狼狐鳩鷲之屬食血肉者皆悉奔飛一向而去時長者子作如是念此諸禽獸何因緣故一向飛越我當隨後暫往觀之即便隨去見有大池名曰野生其水將盡於此池中多有衆魚流水見已生大悲心時有樹神示現半身作如是語善哉善哉善男子汝有實義名流水者可愍此魚應與其水有二因緣名為流水一能流水二能與水汝今應當隨名而作是時流水問樹神言此魚頭數為有幾何樹神答曰數滿十千善女天時長者子聞是數已倍益悲心時此大池為日所暴餘水無幾是十千魚將欲死門旋身宛轉見是長者心有所希隨逐瞻視目未曾捨時長者子見是事已馳趣四方欲覓於水覓不能得復望一邊見有大樹即便昇上折取枝葉為作蔭涼復更推求是池中水從何處來尋覓不已見一大河名曰水生時此河邊有諸漁人為取魚故於河上流懸險之處決壅其水不令下過於所決處卒難修補便作是念此崖深峻設百千人時經三月亦未能斷況我一人而堪濟辦時長者子速還本城至大王所頭面禮足却住一面合掌恭敬作如是言我為大王國土人民治種種病恐令安穩漸次遊行至其空澤見有一池名曰野生其水欲涸有十千魚為日所暴將死不久唯願大王慈悲愍念與二十大象暫往負水濟彼魚命如我與諸病人壽命爾時大王即勅大臣速疾與此醫王大象時彼大臣奉王勅已白長者子善哉大士仁今自可至象厩中隨意選取二十大象利益衆生令得安樂是時流水及其二子將二十大象又從酒家多借皮囊往決水處以囊盛水象負至池瀉置池中水即彌滿還復如故善女天時長者子於池四邊周旋而視時彼衆魚亦復隨逐循岸而行時長者子復作是念衆魚何故隨我而行必為饑火之所惱逼復欲從我求索於食我今當與爾時長者子流水告其子言汝取一象最大力者速至家中啓父長者家中所有可食之物乃至父母食噉之分及以妻子奴婢之分悉皆收取即可持來爾時二子受父教已乘最大象速疾還家中至祖父所說如上事收取家中可食之物置於象上疾還父



所至彼池邊是時流水見其子來身心喜躍求取飯食徧散池中魚得食已悉皆飽足便作是念我今施食令魚得命願於來世當施法食克濟無邊云云佛告善女天爾時長者子流水及其二子爲彼池魚施水施食并說法已俱共還家是長者子流水復於後時因有聚會設衆妓樂醉酒而臥時十千魚同時命過生三十三天起如是念我等以何善業因緣生此天中便相謂曰我等先於贍部洲內臨傍生中共受魚身長者子流水施我等及以飯食復爲我等說甚深法十二緣起及陀羅尼復稱寶髻如來名號以是因緣能令我等得生此天是故我今咸應詣彼長者子所報恩供養爾時十千天子即於夫沒至贍部洲大醫王所時長者子在高樓上安穩而睡時十千天子共以十千眞珠瓔珞遍其頭邊復以十千置其足處復以十千置於右脇復以十千置左脇邊曼陀羅華摩訶曼陀羅華積至千膝光明普照種種天樂出妙音聲令贍部洲有睡眠者皆悉覺寤長者子流水亦從睡寤是時十千天子爲供養已即於空中飛騰而去於天自在光王國內處處皆雨天妙蓮華是諸天子復至本處空澤池中雨衆天華便於此沒還天宮殿隨意自在受五欲樂云云爾時佛告善提樹神善女天汝今當知昔時長者子流水者即我身是云云

猪鼻ノ一　十五日上院下院神幸道路上院南門ヨリ大坂ノ經テ猪鼻到下院南門入也

猪鼻坂出崎也

○南詠下朝有紅顏隨世暮爲白骨橋郊原慶茲保榮

○六觀政要二下特點神慮

○延喜式四十八左馬寮式御牧事詳也

[illegible]

唐三六歳慮事也

百廿二　駒牽　十首駒牽乃かいとる道

[illegible]

信濃勅旨牧十六箇所延喜式所載之一也

[illegible]

御馬解文

○國々ヨリ貢御馬ノ送状也

御馬ヲ給ハル

○江次第云次公卿以下一々給御馬補物取綱牽出一拜畢退出歸著座

引分使

○江次第引分事是可被奉一院　春宮執柄也

○又云並立御馬於庭前先引分令礒人直引出　一院執柄使次將春宮使内裏者坊司來受之或遣將士馬署

又甲斐國穂坂　五疋

○此文西宮記ニ依テ書

六十一代

なりのこの六十余ばかりなる馬ども来

侍所の御馬ども小あるこまにて十余

よりなる家の南殿小あ御ばかりにて御

るの御馬ども解文ゲ云ミ奏を

事なりて公卿殿上人御ばかりを給

つる馬ばかりにて御前ばかり

をとりて一疋ばかりを取のこし御ばかりを

引分使ばかりそれをとりて流東ながら

ばかりなるこまにはの十余ばかりは又甲

斐の國の穂坂御ばかりとひらかはは

武蔵國小野の御馬罪ひらかはは

秩父御ばかりなさを野の御馬十ばかりを毎

年小なりまれ女ばかりは女三日ばかりは給藏人所

の御ばかりなさを八日ばかりを野御ばかりを宰

ひらかるなり　百廿三　雪御ばかり

二月八日ばかりは給藏人所

九日

嘉四　御ばかり

三月ばかりなり

百五十九 不堪田奏　七日 弐日九月五日

毛六ハ国乃田乃摘そ一たら而と奏田源
と一て奉承それよつ申く租税法三
分二なと先一給ふ事ゝ国ふ
諸国ゝ乃庄付帳とそ一てまつ進い大臣陣
ゝ法さく作ゝ定めて諸国ゝ施行し
作一つる法定くつゝよゝ国ゝ
必ず不堪田ゝ申ゝ上ゝ事ゝ
事ゝ

百六十 重陽宴　九日

九月九日ハ花日ゝて行ゝ菊花乃宴行
つゝ之ゝ是を重陽宴ゝ申ゝ九月九日を
月とりゝ九陽乃数ゝ付ゝ少ゝ重陽と
はいゝなり昔ゝ天子南殿ゝ御ゝ
花宴行つゝ三ゝ御子ゝ上ゝ
めゝ其道乃い三れ探題行り文作り
又ゝ宴ゝ小ゝ三ゝ
ゝ作ゝ日もゝ歩ゝ興と行ゝ例ゝ
作ゝ菊酒を飲つる大ゝ小ゝ日ゝ花ゝ今ゝ
用ゝ御帳乃ゝ大ゝ小菜菓ゝ盞ゝ

朝花宴○延喜掃部寮式九月九日菊花宴神泉苑殿上供御座及設参議已上座又幄下侍従文人等座

九月九日｜｜○書言故事魏文帝書歳往日來忽逢九月九日九為陽數其日與月並應故曰重陽

○花宴河海抄云探韻各分一字詩也

費長房〳〵

○續齊諧記云汝南桓景隨費長房遊學累年長房謂之曰九月九日汝家當有災厄急宜去令家人各作絳囊盛茱萸以繫臂登高山飲菊酒此禍可消景如言舉家登高之還見雞犬牛羊一時暴死長房聞之曰代之矣今世人每至九日登山飲菊酒帶茱萸囊是也

菊酒をのむとくまゝに菓子の房をわく
花紐カメ
弱よくしいさわい西氣をうけしいよ年又
あらしく費長房とゝふ仙人汝南の桓
景ふうていいとくみ月九日ゆんぢう家
よ災をへ〳〵菓子の囊をめいくひら小
みゆふのがつとく菊酒の酒ぶこ厄災
きゆへ〳〵とゝ生れいとゝ日ふいうてむ
しへのとく髣髴はうけ多い法がが
うとして家中乃鶏犬羊〳〵とゝ死
うとうけくのうけるとして生ふを
功能

昔神祇官行幸ナリテ

○昔八省院ニ行幸ナル延喜式大政官式云凡九月十一日行幸八省院奉幣於伊勢大神宮其使者大政官預點五位以上王四人卜定者一人大臣奏聞宣命授使王共神祇官中臣忌部發遣事見儀式

○其後神祇官行幸ナ後醍醐半中行事云十日例幣行幸ナリ出御ノ儀常ニ内侍劔璽ヲ持テ前後候近衛次官若ハ藏人扶持ス御輿葱花ヲ用ヒ司鈴ノ奏ナシ神祇官行幸ナテ北戸御輿ヲヨス帳内ナリ内侍二人候近衛ノスケ劔璽ヲ取傳

菊酒をのむとくまゝに

夏七 例幣 十一月 江次第九

一日ふいとくまて俗尼重祿服
人参内をとゝ乞い大神幸ナ所なら
例幣ナ伊勢左神文へ御幣をなもせ
ゆふ年ハ御事なふまて例幣と
ゆ也苦い神祇官へ行幸ナりく山事
行いる祭主中臣忌ア部ウラ参て御
幣を清ていい使乃ゑ御ゐ戸車
ゆく常ハ拳幣ハとゝ此事朱雀院

加常ノ下御ナリテ平敷ノ御座ニワタラセ給大床子モヨリヘリ所ヲ布ノ衝立障子ヲ立テ隔トス東ハ御廚子ノ間ニ御幣ヲ畏テ案ニオク兵具ニムケタリ次ノ間ニ御禊ノ御座ヲ設ク常ノ如ニ先御湯殿ノ了リテ上卿廊ノ座ニツキテ宣命ヲ奏ス帛御服ヲ奉テ内藏寮御禊ノ御座ニ著セ給御笏召テ先御拜アリ次ニ舎人ヲ召ス二聲少納言參テ版ニツク中臣忌部ヲメセト仰ラル少納言ヲ謝テ仰ヲ奉テ高ク稱唯シテ揖シテ出テ中臣忌部ヽイリテ版ニツク先忌部ヲメス忌部參リテ外宮ノ御幣ヲトリテ部ニ傳フ其後内宮御幣ヲ忌部

乃御はしらのつめにおいまつ神風のほうか國に御鎮座ありし事淡田にま仁天皇廿五年三月に倭姫命のとしへましまして五十鈴川上に神宮をたてられさせて外宮ハ内宮の鎮座乃後四百八十年とへて雄略天皇乃御宇に丹波より（廿一年丁巳十月朔日）まさしめ給ふ其のちも毎年九月十一日にちしめして官幣をたてまつる

百八　撰虫

是ハわかうちに或ある事にハあらし歟

カシハテシテトリテタカク捧持テ版ニカヘリツク次ニ中臣ヲメス中臣祭主ツトム參テ御幣タテツクヱ案ノ下ニ跪ヨク申テ奉レト仰ラル中臣稱唯シテ出使ノ王ニ御馬申事ナト恒ノ奉幣ノコトシ神祇官東門ヲ出テ二条ノ大路ニイタルホトニ御座ヲタヽセ給警蹕ノ聞ユルナリムテ還御常ノ如シ

［使王］江次第ニ云夷王可給馬ヲ以外記ニ付藏人ニ被奏歟

［神風伊勢國］○神風ハ伊勢ト云枕詞也神武天皇ノ御謡ニ伽牟伽筮能伊齊能宇瀰トアソハサレシヨリ始マル日本紀ニアリ何タル故ニ神風ノ伊勢ト云ト云ニ伊勢國風土記ニ云夫伊

上乃逍遥にて殿上人ともあそひて嵯峨野なとへむかひて虫を籠に入てまゐる是ハ堀川院乃御時よりはしまるおほけれは松虫鈴虫なとは諸人も内裏へ奉る又賀茂の社司なともに御まゐらすることあれとも毎年

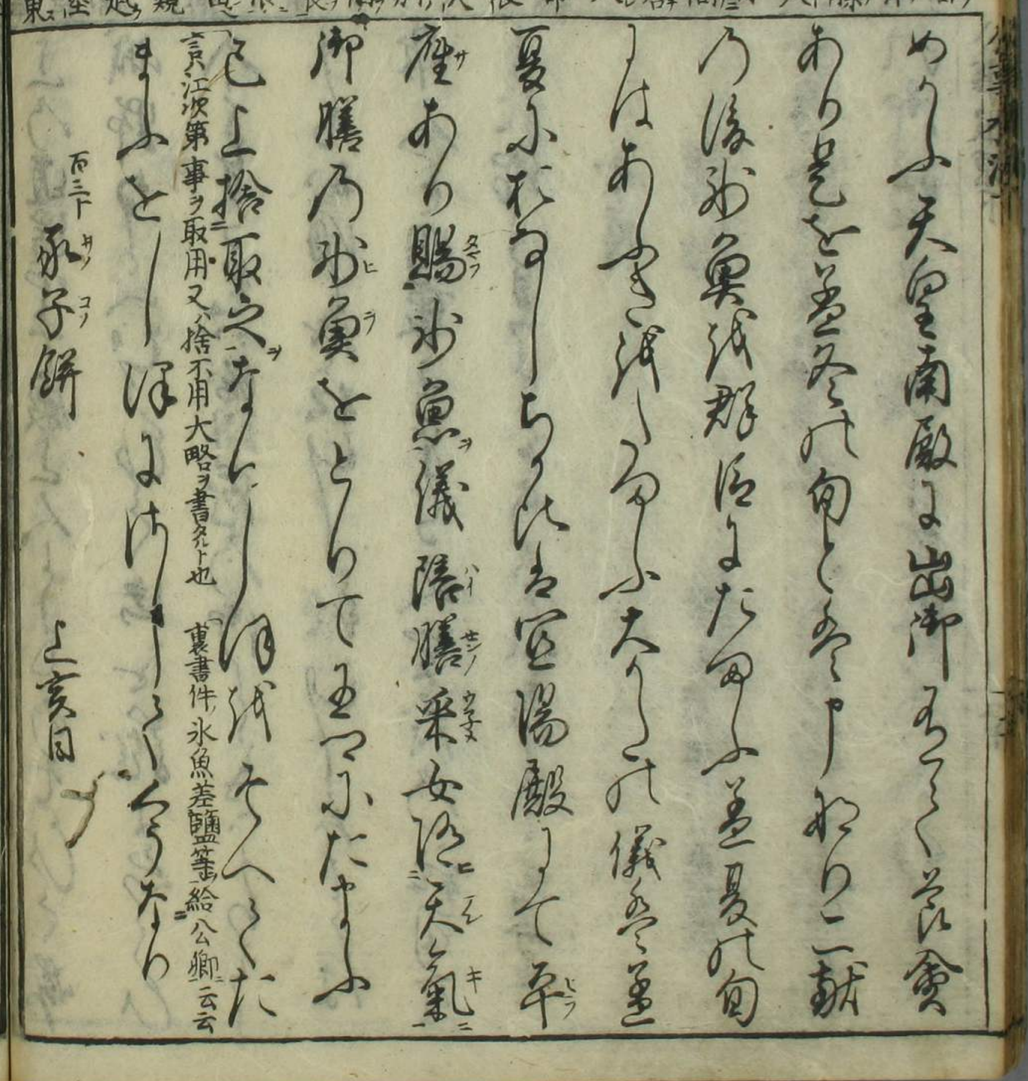
十月

百九　旬

朔日　江次第六ニ二孟旬儀

十月一日は先御衣乃あり掃部寮畳は御装束を撤して冬乃にあらた

勢國者神武天皇勅詔天日別命曰國有天津之方宜乎其國印賜標劒天日別命奉勅東入數百里其邑有神名曰伊勢津彦天日別命問曰汝國虜於天孫哉答曰吾覓此國居住日久不敢聞命矣天日別命發兵欲殺其神千時畏伏啓云吾國悉獻於天孫吾不敢居矣天日別命令問云汝之去時何以爲驗啓云吾以今夜起八風吹海水乘波浪將東入此則吾之却也天日別命令整兵窺之比及中夜大風四起扇揺波瀾光曜如日蓋國海共朗遂乘波而東



為古語云神風伊勢國常世浪寄國者蓋謂之也記曰國宜取國神之名號伊勢

倭姫命○垂仁天皇第四之皇女也○二所大神宮鎮坐事倭姫命世記鎮坐本紀鎮坐傳記三詳也

養老五年○續日本紀八養老五年九月乙卯天皇御內安殿遣使供幣帛於伊勢大神宮○禁祕御抄云蟲松虫　鈴虫　類人人進之

武被召賀茂社司神河院御時頭以下向嵯峨野誠有道遥是綜虫屋向選虫奉之

○內膳司式云山城國

此餅い門菅寮ゝ

延喜式無文日餅事政事要略二十五引藏人式云十月初亥日內藏寮進殿上男女料餅各一枚○本朝書籍目錄云藏人式一卷楊廣相撰廣相貞觀年中人

高倉院

近江國氷魚網代各一處其氷魚始九月五十二月晦日貢之今案近江田上網代モ名氷魚ヲ山城ノ宇治ニテ取上云リ云ハ俗名鮒云鮒考聲切韻云鮒音小今案俗云氷魚是也初學記冬事對雖有氷魚霜鶴之文而專其義非白小魚名也似鮒魚長一二寸者也

○西宮云久ニ賜氷魚乘女取氷魚盤立座前庭一人名内竪云參進公卿ノ取云○宇治網代木ハ氷魚ヲ取爲也後宇多院御宇沙門慮尊ノ奏請依テ弘安七年二月廿二日官符ヲ下サテ網代停廢ス

百九十一 射陽姫 五日

先月の三日小兒湯ヲ湯入朔ヲ法ク
ル日ハ天子ゆきなかの射場ニ行ク弓
を御覽ぜらる迎ヲ下東宮ヲ召テこれ
ハい射天子御射席ヲ志ル迎テ弓矢
を射場ニ行ク弓ハ射場ニ行ク
ぜらるひとり矢ゆきを射場ニ行ク
也射場ニ行ク
なる誠ハ文武二門ノ道ヲ行ク
ぐるぞ今天子も弓場殿ニ行
ぐ武道をなぐるぞ射場ニ行ク

百九十二 射場姫なくい賭ら物への
羅ら賭らなくい根撰ノ表わつ色ぐる
者とり也

百九十二 菊宴 八月

昔菊義ぎん九月九日ニて文殊菊ノ花
を十月ノ月ニ行ク事ハ菊ノ花
那ニ酒ヲ作ル事 重陽ノ
作ル

百九十三 興福寺法華會 六日

九月廿日ヲ七ケ日ノ間南圓堂ノ

羊子餅 十月亥日餅ヲ食スレハ

○政事要略第二十五羣忌隆集云十月亥日食餅除萬病徐鉉初學記卷之二十六雜五行書曰十月亥日食餅令人無病

朔○漢名鮒揚氏漢語抄云射柴以久波止古路世間云阿無豆知今按久用朔字

○江次第殿東欄下敷小筵二枚其上供半帖高麗

○菅家文草第五情幾菊各分一字應製序云黃華之過重陽世俗謂之殘菊○類聚國史七十四桓武天皇延曆十六年十月癸亥曲宴酒

酬皇帝歌曰已乃已呂
乃志具礼乃阿米爾第
乃波奈知利曽之 奴倍
岐阿多良蘇乃香乎賜
五位已上衣被

長岡大臣 ○房前之孫
真楯第三之子也延喜
十八年四月十九日任
右大臣弘仁三年十月
六日薨

春日明神ノ ○新古今
云榎本明神ノヨミ給ヒシ歌
トリ○新古今第十九
神祇歌 補陀落南ノ
岸堂多ク今ノ九ヘ北ノ
藤波 此歌興福寺ノ
南圓堂ツクリ、ケル時春
日榎本ノ明神ヨミ給リ
ケルトカ 榎本明神諸
神記云自春日社地坐
女神也是言勢姫明神
又一書云榎本社者猿
田彦孤津姫命也

補陀落南岸 ○尋尊御
記云興福寺一名観音
寺貞音古寺也厩坂寺
事也補陀ラクノ南岸
詠歌此故也

山階寺トモ申カ 元要記
第一巻云天智天皇即
位八年大織冠ノ鏡宝鏡
女王奉爲大織冠山城
國宇治郡山階郷ニ伽藍
立テ丈六釋迦像ヲ安
置セラレ山階寺ト名ク
次ニ天武天皇即位元年
申都ヲ大和國高市郡
遷サレシ時山階寺ヲ彼
郡厩坂移造リキ仍號厩
坂寺元明天皇即位二

月六日長屋大臣門廣乃御子忌日ふるに
りくしもなく大臣流謫ふ所の大臣
御子ふるに父乃御ふるに
南家堂乃本堂霧窠觀音乃像
毋小四天王像い長岡大臣乃造立
給ひしとの小閑院大臣ハ南家堂を
造てこ落ちを安置給ひ也
補陀落乃南ハ海岸孤絶處補陀落伽山譯者以謂小白花山
山谷詩十九

[illegible]
人まの中小海一つの給くわそこ
[illegible]
[illegible]乃事ハ[illegible]南圓堂を建立時
[illegible]乃事ハ[illegible]
小家武家京大夫麻呂 式部卿宇合命本名馬養 房前 四門 武智麻呂
[illegible]三家ハ結果[illegible]小家のこうへ
事ハ[illegible]より[illegible]神奇[illegible]
百官 維摩會 十日
[illegible]十六日ふ[illegible]
[illegible]日[illegible]
[illegible]維摩經を講[illegible]

年記和銅二年都大和國添上郡平城宮遷サレシ時大織冠ノ子淡海公ノ春日勝地被立伽藍此時改額号興福寺同七年甲寅被遂供養此一寺之内被建立堂塔十地

○維摩詰所說經十卷
第五卷有間疾品

和銅七年政事要略慶雲二年ト アリ

朝之爲朝蓋是會力政事要略維摩會右先正一位太政大臣奉爲聖朝安穩社稷無疆護國弘誓始開斯會

大織冠病悩ニテ薨サレテ政事要略第廿五卷出タリ

十六日癸丑大織冠の御病日々に加はる興福寺の大織冠の御願にて山階寺にて大織冠病悩

大粮申文

○江次第大粮申文十月申一ツ上加尅文一枚申之如例申文扶義卿爲左大弁諸司之時作大粮弐諸司諸衛有定國院官隨時出入爲閏月之時又頗作代其後成官符近代諸司院官不待官符成催牒諸國物以件請文成承知符寂可准

則此一ふを編しまつる

つるかの大臣の御病日々に重きを

大臣薨前合掌して生る世に大家小野依

功なしたりいまだ終小維摩會い和

銅七年小淡海公興行をしまつる今

年小山會いまだ國まもなくして

行はるる小野の宰相の御詩有りと名

聞三國會興福寺之初蓋是會力

法ならひなくしてひとりとなれと

百卅五

大粮申文

○謝恵連雪賦盆尺則呈瑞於豊年六花文則表沴於陰德　冬雪降月出度事十八章ニ見參スル也

藤毫○倭名鈔飛香舎在弘徽殿北布知豆保

○禁秘抄藤毫藤懸桃手木上古非桃手木歟近比殊勝物也

○禁秘抄云年内雪藁催所衆瀧口參春雪香鳥隠必可參

百廿六　初雪見參

昔初雪乃日殿上人仕ると初雪見參ると也桓武天皇延暦十年十月十日ニ初雪降ると云記ス

清少言記三所衆三四人參リアソミリテ大炭草紙第二物ヲヒラセガネナル物ト云所ニ詳也

肥後守清原元輔女一條院皇后之時女房

枕草紙第二物ヲヒラセガネナル物ト云所ニ詳也

冬雪乃不ふる時ハ殿上人仕ると

公事根源下　二十五

冬雪も常ハ殿上人仕ると

十月

百廿七　御贖物　一日

百廿八　供奉御願

百廿九　御厨饗

中務省より御門の屏をもて
立て南面に小御所をもて設あり
宮御所の内の門の名は内侍所の内の
間の名は十一月と四月とは
家の名は四月と
月とは池殿といふ夏の世は
今は四月を二月
寅月也
二陽ぢりて生ぜざる
数とかんがへ今日を子の月
面白しと為の月とい
白虎通に班固作也
○白虎通三巻三正章
禮三正記曰正朔三而
改文質再而復也三微
者何謂也陽氣始施黃
泉萬物動微而未著也
十一月之時陽氣始養
根株黃泉之下萬物皆
赤赤盛陽之氣也故周
爲天正色尚赤也十二月
之時萬物始牙而白白
者陰氣故殷爲地正色
尚白也十三月之時萬
物始達孚甲而出皆黑
人得加功故夏爲人正
色尚黑

十一月
五月也
十二月也

欽明天皇十四年夏六
月別勅醫博士易博士
曆博士等宜依番上下
令上件色人正當相代
年月宜付還使相代又
上書曆本種種藥物可
付送

賀表○江次第一大臣
以外記令仰上﨟儒士
令作賀表或大臣自仰
之

神龜二年○續日本紀
第九聖武天皇神龜二
年十一月己丑天皇御
大安殿受冬至賀辭親
王及侍臣等奏特奇獻
珍贄進之即引文武
百寮五位已上及諸司
長官大學博士等宴飲

欽明天皇十四年百濟の博士の奉り書
とあり
雪
朔日
一日
見い十一月の条に
なり此年小一度まつり年うてはでこそ
祥瑞なりとそれをしいまこの南
面小御所なりこの旬とかうこの表
と奉る事なり
[注云第二朔旦旬ヨリ]
神龜二年十一月
小正月大安殿ふ御所にてこの乃賀
辭とうけ給はり国史ふのをこの

終日極樂乃龍賜祿各有差

神祇令云 ○神祇令云仲冬上卯相嘗祭 義解 謂大倭住吉大神穴師恩智意富葛木鴨紀伊國日前神等類是也神主各受官幣帛而祭

大倭 ○大和國山邊郡大和坐大國魂神社三座

住吉 ○攝津國住吉郡住吉坐神社四座

大神 ○大和國大神大物主神社大神朗大三輪也

穴師 大和國城上郡穴師坐兵主神社

恩智 ○河内國高安郡恩智神社二座○文德實錄第二嘉祥三年冬十月辛亥授河内國恩智大御食津彦命神恩智大御食津姫命神等並正三位

意富 多也 ○大和國十市郡多坐彌志理都比古神社三座

葛木鴨 ○大和國葛上郡鴨都波八重事代主命神社二座

日前 ○紀伊國名草郡日前神社

神主 ○令集解云大倭社大倭忌寸住吉社津宇連大神社大神氏穴師社穴師神主恩智社恩智神主意富社大朝臣葛木鴨社鴨朝臣ト云

ヨロヒ胸形社也 ○延喜式神名帳筑前國宗像郡宗像神社三座

我朝のことぶれ異國にことなれり

左傳僖公五年正月辛亥朔日南至公既視朔遂登觀臺以望而書禮也

事ごとに中ゆ事ともあるべきなかにもとびきりはあるべきなれども

ゆゑなきなれば是はみな

十一月一日の事よいきうし

ゆゑしきなり

臺一 相嘗祭 上卯日

神祇令云大倭住吉大神穴師恩智意富葛木鴨紀伊國日前也神祇官幣帛をうけ

ことなるものおこなはれ

延喜式には相嘗祭乃神七十一座とみえたり相嘗と書てあひなべの祭とよむ也

五甲二 宗像祭

同日ヨリ宗像朝臣ト云大巳貴命末葉也

氏人宗像君也天武天皇

ゆゑ胸形社乃祭也氏人これをゆゑ胸形社乃祭也氏人これをもて胸形の神と天照大神と素盞嗚尊とのうちの胸形の神なり

命二法三神ゆゑ湍津姫命市杵島姫命田心姫命なり日本紀乃神代上卷に多くしき事ハこれあり

素盞嗚尊ノウミ各ヒヒ○宗像神、天照大神ノウミ各ヒヒ神也天照大神勅ニテ素盞嗚尊ヲ[illegible]ヒ、ヒメ三ノ湍織津姫命○湍津姫ノ訛也湍織津姫祓所ノ神也阿波良波命傳天照大神荒魂ト云倭姫命世記ニハ八十枉津日神一名ヒノヒ宗像三神内ノ湍津姫ト別神也○田心姫湍津姫市杵嶋姫三女神ハ天照大神神勅汝三神宜降居道中奉助天孫而為天孫所祭ト云神勅ヲ受テ筑紫洲ニ天降玉フ外ハ此神祭事事ナル(ヒ)

四月小おなし

百四十三 山科祭 上巳日

百四十四 平野祭 上申日

是も四月小おなし 祇園ノ祭も同しくこと

百四十五 春日祭 同日

是も二月小同

百四十六 杜本祭 同日

四月小同

百四十七 當麻祭 同日

同

百四十八 宰門祭 上酉日

二月小おなし

百四十九 梅宮祭 同日

四月小同

百五十 當宗祭 同日

四月小おなし

百五十一 中山祭 同日

おなし

百五十二 松尾祭 同日

四月小おなし

上巳中丑日なり

丙辰三 大原野祭　中子日

二月小初午　丑日なり　中子日

丙寅四 園韓神祭　中丑日

二月下初午　中丑日なり　中子日

嘗祭　上巳なり　ひどなり　上巳

日なり

丙辰五 五節　同日　丑二あり　上巳用

武下丑日用也

○裏御直衣御指貫浮文織物裳御指貫霞此寮文也深紫浅紫共有例

○表袴大口

○張袴

○生袴

中丑日なり　五節帳台試なり　常寧殿なり　上巳なり　人々なり　酒いりの儀式あり　うらくはなり　いまだ　儀式あり　うらくはなり　て帳台試あり　御うら殿なり　人々も　脂燭より

さうの如　御直衣　指貫　御袴

侯名抄　奴袴　佐師奴袴　枳乃波賀　漢語抄云絹狩袴或云岐奴乃加利ハ加萬

沈　先　上　御　上　めもとめ

禁秘抄詳也

車　上　御　乃　御　いな　御　鞠　乃　時

帳台試　御　清　て　なり　帳台　御

おうさう　なり　行幸　乱舞　あり　ぐんたい　雅

○文選十一孫興公遊天台山賦凝思幽巖朝詠長川善曰朗猶清徹也翰曰朗高也

郢曲謳歌也

○楚辭宋玉對楚王問云客有歌於郢中者云其曲弥高其和弥寡

○卯日童御覽事雲圖抄詳也呉竹臺圖下下仕參上之道也從承香殿西橋降立庭中南行但到竹臺下下仕從竹臺之西頭令步藏人自東頭行合故實也近代不知案内云事書云童女參御前雲客副之或名嘉雲客持參　次下仕參藏人副之各一所參畢又名他所也江次第云殿上人付童女傳事書等又云下仕等取几帳三本相從理髮相具○又云藏人頭進向長橋東禁陪從等關入免入之者理髮一人童女二人董鑪茵陪從一人近代不持几帳下仕二人

○江談抄第一云清淨原天皇之時五節始之於吉野川鼓琴天女下降出庭前詠歌天女歌云ヲトメカヲトメサヒシモカエタマヲラトメサヒスエモノカラタマヲ出本朝月令之由河海抄乙通女卷引之

琴を引給ひ御まへの巻うらの女あまく
うらてはまの相衣乃袖と五度離し

○又云承平五年無殿上五節寛平昌泰間闕

五節舞姫ヲヒリ ○政事要略第廿七年中行事廿七 十一月三辰日節會事 五節舞者淨御原天皇之所制也相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄尒之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣髴應曲而舞獨入天驕他人無見褰袖五變故謂之五節其歌曰乎度綿度茂邑度綿左備須茂可良多万乎多茂度途麻峻底乎度綿左備須茂

宇摩志麻治命饒速日尊第二子也 舊事本紀磐余彦尊元年十月庚寅宇摩志麻治命初齋瑞寶奉爲帝后鎮祭御魂祈請壽祚其鎮魂之祭自此而始矣

御脫屣 ○御讓位ノ也 ○文選四十三北山移文屣萬乘其如脫註淮南子曰堯年衰志閑舉天下而傳之舜猶却行而脫屣也許慎註曰言其易也

モラテ ○倭名鈔祭祀具葉手 漢語抄云葉手比良天

てなるもの紙をたくさんにしてたまと
[さひずれ不衰也後撰注衰ヲサヒテヨミ]
うちふかぬさくとて紙をたくさんにしてもも
うちひきうちうちやちうちをたて年ぬ
五月ふかぬさしを内裏にて五節乃舞
いかりきうとて

百五十六 鎮魂祭 十一月中寅有二寅下寅行之有中富日例云而新嘗會前可行之由見式

それ人は魂魄乃二乃ものあり魂陽氣
魄は陰氣なりてこれをふい離極れ魂魄
まものきうく身新乃中府ふたりせうく功
能あり宇摩志麻治命に対うる事れ

庚寅宇摩志麻治命初齋瑞寶奉爲帝后鎮祭御魂祈請壽祚其鎮魂之祭自此而始矣

うるうく舊事本紀なとをみうく
此ふを如法ふれうるうるを殊勝乃御
祈と成るきうやうれい白川院御
脫屣乃時も院中にて行幸ぬ
東宮中宮にて年くあう事なり
文德天皇
天安二年ふたりめうくを行ーを無乃
ぬうれうく貞觀元年十一月神祇官て
ぬうう今なくこれ年ふうまう
百五十七 新嘗會 中卯日
新嘗會い神今食はあうーひうて乃

十三也其外いろいろ沢山今度
ゆ稲を神へ奉る場所の義なり代
乃始ふい大嘗会といひまことに新嘗
会とも也ト食乃人と拠衣日蔭を考と用
時天皇二度嘗ゆ新嘗乃事いとゞ
まゆ大ゆ神代ゆ事おこまゆ事
紀ゆもて照大神ゆはなひ考こゆ
すこゆ考こゆ

百五十八 ゆゝ節会 中辰日

見今度乃稲と神へ奉ゆ世ゆ行こゆ君

○江次第次給白黒酒
各一度稱名給拍手飲
之
○左傳昭公元年云先
王之樂所以節百事也
故有五節杜預註五聲
之節
○江次第云舉袖五變
故曰五節
○漢書文帝紀贊曰嘗
欲作露臺召匠計之直
百金上曰百金中人十
家之產也吾奉先帝宮
室常恐羞之何以臺爲
師古曰今新豊縣南驪
山之頂有露臺鄉極爲
高顯猶有文帝所欲作
臺之處

ゆ江次第ゆ給白黒酒ゆ
各一度稱名ゆ給拍手飲
ゆ
○左傳昭公元年云先
王ゆ樂所以節百事也
故有五節杜預註五聲
ゆ節
○江次第云舉袖五變
故曰五節
○漢書文帝紀贊曰嘗
欲作露臺召匠計之直
百金上曰百金中人十
家ゆ產也吾奉先帝宮
室常恐羞ゆ何以臺爲
師古曰今新豊縣南驪
山ゆ頂有露臺鄉極爲
高顯猶有文帝所欲作
臺ゆ處

フシノツカサニ御コトメス

○源氏繪合巻ニアツ
カ御コトメシイテ、河海抄
圖書寮ニ納累代樂器
所也

惣紀ヒ基 由紀、天神ヲ
祭主基、地祇祭也
○日本紀天武天皇五
年八月丙戌神官奏曰爲
新嘗ヒ國郡也齋忌此云
諭則尾張國山田郡次次此云須
岐則丹波國訶沙郡並
食ト私記云湯者潔齋
之義也由紀者伊波比辺
與麻波惠ノ辭也主基古
稱須支ト師說次於齋忌
也今稱主基者訛也先
師說主基者相繼于湯
貫同可齋忌之故

ふるまひ
儀式のごとし 次舞乃終
舞臺ヨリ紀基ヲ
ちらんとて殿
上人ら侍ひ
度うて御遊あり 東ちうくりてこれ
ふ御帳乃東ちうくりてこれ
車をもんの方に御ことめ
なりしかとも
圖書寮也
を何よりもこの事いとしなり
ちうの辰乃日は節會い大嘗會乃時公辰
日を惣紀乃節會已日は主基乃節會

八月延暦寺衆徒長樂寺ヲ
テ〜〜 ○建暦三年七
月廿五日清水寺法師
建立一堂其地在清閑
寺領之由彼寺憤訟相
論之旨清閑寺爲合嶺
之末寺山又咎之清水
寺依爲南都末寺奈良
殊怒之而八月三日清
水寺構城山僧集會于
長樂寺自公家先遣檢
非違使有範惟信基清
等破却清水之城制止
武備急著法衣可在佛
前之旨被仰含寺僧承
伏之相次遣廳官長吏
於長樂寺被禁制之處
所司法師等僅相逢更
無承伏之詞惡僧等奚
吐奇怪之詞殆及放言

中申日
百五十九 吉田祭
同日
百六十 日吉祭
同日
百六十一 日吉祭
同日
順德院
建暦三年十一月十八日ちうしてち
殿上ヲ使とちうしてめうの八月小延暦ちう
衆徒長樂ちうして官長乃ちうを
ふちうの車小ちうて長ちうの御祈ちうちうん

実茂隆付祭　下酉日

先酉日小試樂調樂なしいつ事ゝ南
日乃儀式御神楽遊乃庭ゝ石清水
社乃義ゝて使舞人陪
ゝ引直衣小御草鞋とり部ゝ
御ゝ舞ゝ階乃間ゝ
小二物舞庭ゝ使舞人
物小手束乃神楽乃所作人陪従
人作ゝ御ゝ

江次第三献

懸頭巾也里第儀無額

祝祠官云天台仏法及魔滅期歟見東鑑二十二
○雲圖抄云還立御神
樂賀茂儀也翌日有御
物忌之時或止之
石清水儀無御神樂有
御前儀近代絶了
○江次第云次人長名
笛篳篥琴歌等笛本篳
篥末和琴本一歌本二
歌末依次居分畢次笛
篳篥相和

勸盃　柱下類林十七帙
第三儲君部勸盃作法
事佐示曰跪飲了起授
盃可唱平歟而藤中納
言曰如造酒司先不可
飲只受酒可授盃之由
藤訓亮範朝臣此条未
是非了又件盃居盤之

長階の下ゝ階の下ゝ
舞人とり上ゝ
庭火ゝ
ゝ御ゝ神楽ゝ
松風巻河海抄近衛舎人造身也神樂人長ハ被管役也
乃ゝ
○古今冬賀茂祭上云童蒙抄云冬ノ賀茂祭ハ臨時祭ヲ云其瀧鶴ヲ尋ニ宇多御門
イニタ王侍從ト申侍時賀茂ノアメリニテ御狩ニ給ヒシ時ニ云云
小賀茂乃大御神ゝ
ゝ

由藤中納言伝之云予答云跪飲了弃清濁乍居又受酒授盃了可限平至次々之人者乍立受酒自不飲之授盃可唱平歟如藤中納言存知者可爲献盃歟代詞勸盃之由皆記之跪条又無不審歟土器也可在此旨之由説之

[illegible]れいなうありてよしとてあ
[illegible]ひちりぐいく給まくしてた
[illegible]もらぬ給はせられい
[illegible]十一月より始祭をとりを
たまふ其時乃使下官流乃大臣時平云
いまゝ右中将ねりて仕給たまひけ
[illegible]

[illegible]

六月朔日 [illegible] 祇園乃御願 [illegible]

[illegible]

國忌 職員令義解國忌謂先皇崩日也

崇福寺 拾芥下末崇福寺近江國志賀郡號志賀寺天智天皇御願

朱烏二年 朱烏ハ天武天皇ノ年号朱烏二年ヲ終ヲ其明年ハ持統天皇元年也

中興 祖庭事苑第六卷云王室中否而再興謂之中興如周之宣王漢之光武唐之中宗天智天皇ハ朝敵蘇我入鹿ヲ誅シ天下ヲ治玉ヲ故ニ中興ノ主ト云

[illegible]

大神祭 上卯日

三箇乃大祭乃祭なり四月小なり

國忌 三日

天智天皇御國忌なり崇福寺にて
[illegible]朱烏二年[illegible]天智
[illegible]御子御母[illegible]天皇
なり御位[illegible]近江國志賀郡
大津乃[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふきたる祇園ともゝ[ノ]ゆきうゑ

百六十六 御[ゴ]体御[ミ]ト奏 十日

是も六月小れうし上御陣乃座ふ
ゆきく御ト[ミ]と奏上御ト御所ふとて
まろ[ハ]年六月まて乃事ゆうゆう
ゆ方乃神法あまりあるべいのうゆへき
うゆうゆ戴新地

百六十七 月次祭神今会 十一日

ゆふ六月乃うゆうゆ

百六十八 御[ゴ]仏[ブツ]名[ミヤウ] 十九日

○雲圖抄云以地獄變御屏風七帖立七ヶ間也有繼鎖子等或書云若無件御屏風之時用漢書御屏風

○雲圖抄裏書初夜自亥二刻至子二刻後夜自子三刻至丑五四刻

ゆうゆう六月一日まて三ヶ日なり或いハ和
も例あり仁壽殿乃御本尊をうゆ
て御帳乃中ようけく南乃新乃間ふ又
南北ふ机をうゆて佛像落新をゆ佛お
ふ香華ゆうゆうなりひうゆふ池獄
饗乃御屏風とゆ[ハ]ゆ居[イ]のとけ家勝縁
ゆうゆうあふ史樋ふ行ゆ松芳院
女嬬ゆうゆをひうゆふ[カ]ゆ
初夜中歌法和をゆく御本尊ゆう
ゆうあふゆ人をとゆうゆを

○江次第云今夜蓋栢梨左近衛府攝津在名梨也以彼地利所造之耳糟也

裏書曰栢梨昔府中將和氣某以攝津國栢梨庄寄左近府以其地利充官人以下酒醪料

綿乃事を衣きこれをふりて法のく
をはこれ小小内侍殿下といひく見を
とうけ〻あれ義人御厚仰乃扇ふう
法をうこと事をそして名酒あり所扇激に
まてこれをめる栢梨乃勅宣をといふ
事をそれいたを傍府乃仰を摂津國
栢梨左といふ所より御酒とをりて殿
とりて勅宣乃あるをりまこ佛名乃中
を表をとたゐ乃と法并ひあり弓場ふ
て世一ッのかとたを大將をる仰を摂津國

○三世諸佛ノ名号一萬三千佛名号也

○佛名經七卷後魏北印土藏流支譯

○佛名經五卷元魏天竺三藏菩提流支譯

塵囊鈔第九云仁明天皇承和五年ヨリ佛名アリサレトモ有無不定十三年三被定置以降用十六卷佛名經此中所載佛菩薩賢聖等名一萬三千餘

ふうちなをれ栢梨を御ゝ法所を
ふ也佛名乃御厚仰を首い表りをる
ふ形へをれを延喜乃御代をとい表御
殿をて和琴をうきあをを始ををう
や此佛名といふ三世乃法佛の名号を
唱へ〻言根乃罪と滅ををの中をり
佛名を仰ふを御所功德いをうな
きをうや貴を悪をを十二月をりもを
表和氏法い毎年十佛名三ケ日乃あひをは
法國をて殺生禁断乃ら格ふみをう

也然ラ玄鑒内供上奏メ
十六卷ノ佛名ノ略ノ延喜十八
年三千佛名經ヲ改修セシメ
遂ニ此ヲ定式トス然ルトモ導
師作法ヲ不改於初後ニ必
猶萬一千佛名ト唱ヲ故
實トス

五月十九　沖髮上　下午日

義人沖ら法名ヲ付りて
を殿察よりひて名ゝを此れ
教事ヲ

五月十　立土牛童子像　大寒日

大寒の日東方小法陽沖ら牛童子の像
を門口ふ右陽の待賢門ハ都ら北牛
と西門美福朱雀門ハ赤ら南ら淀ら
藻礫門ハ白ら安嘉偉鑒門ハ黑ら
都芳門ハ黃ら般富達智門ハ黃ら

ふらなり青ら春ら春ひんゞふ
なり赤ら夏ハ夏ハ秋蘭ふ右白ら
秋ハ白ら西ふ右黑ら北ら冬ら
ふら四方ら門ふまゝ黃ら中ら牛ゝ
ゝ中央ら法ハ中ら木火金ら
ふハゝ中ら中ら
病ゝ中ら百姓ハ中ら
は牛を法ら遊ハ
まりき異國ら書ハ農事ら
何と牛と牛ふ

○月令季冬之月命有司大難旁磔出土牛以送寒氣

○園記觀應元年荷前
停止當不及承事也
○先十三日――侍リ
ケルニヤト云ニテ後醍醐天皇
年中行事ノ文也其下ニ此
比おなじ事なれど
面影許ぞうとアリ
○十陵　山階山陵天
智天皇　畑原山陵光仁天
皇　栢原山陵桓武天皇
八島山陵崇道天皇
深草山陵仁明天皇
後田邑山陵光孝天皇
在仁和寺内大教院丑
寅　後山階山陵醍醐
天皇在醍醐寺北曼陀
羅堂丑寅山槐記云醍
醐北小野也　中宇治
山陵贈冷泉院母皇太
后宮藤安子　後宇治
山陵贈皇太后宮茂子
後宇治山陵贈皇太后
茨子烏羽院母
○八墓　多武峰鎌足
大和國十市郡
愛宕忠仁公　葛野仲
野親王　或云高島墓
後葛野當宗氏　或云
河島墓　宇治郡宣公
小野高藤公　後小野
宣道氏　後宇治皇太
后班子　以上八墓
今宇治冷泉圓融母后
合九墓
昔此御門御馬ニメサレ
イトノキセラレテ侍キ
○此俗說也又俗說帝
登天ニモ其ヲサレシ馬龍
ノホトリニトニハ其龍ヲ駒
龍ト名トイヒリケレモ日本

五十五　荷前

擇吉日　延喜式中務省式云
九十二月奉諸陵幣者令陰陽寮擇日訖卜部申官

先十三日ふつかくとまくとかくとめ
使いたるもの人のとる次官をひとり
荷前使の宮内はかくる元日儀
使乃宮内はかくるめあるいは賀乃こえたる
勅賀乃に何も祝こはさしつかうまつる
荷おくるは十陵八墓ふくれたりふ幣帛
とまつる也拾芥下本云十陵九墓隨時廢置之天智天皇山階永不廢
皇乃はさぎき山城國宇治郡也山階より音羽御
門御馬ふりさけて中かの里より幸
ありて其まゝ帰給いさらきとの多ゝ嶺
和といはぐ在人なりしを多河皆れに
ちぐまつる原ふ河さきとぐた
てまつる伊とりさする事をて伊き
う法部い河礒を皇れ田原れはさき桓武
天皇乃桓原乃はさき崇道を皇八島
乃御さきき仁明天皇深草乃御さきな
どなりさのくりまれをふるとも
五十二　若鉄改
五月ふ初ま

大和國添上郡
桓武天皇第早良親王也
在拾芥下南野山槐記云伏見山松原也大和國添上郡
在嘉祥寺内

紀ニ見ヘ天智天皇十年九月ヨリ寢疾不豫十月疾病弥留十二月乙丑崩于近江宮トアリ萬葉集ニモ天智天皇不豫并御病急崩御時太后奉御歌トモアレハ俗說信スヘキタラス

百七十三

内侍所御神樂　雲圖抄以吉日被行之

主上行幸ありそ侍掌始まりて殿上人
いくらか二人ふ本丁をさして内侍所より
幸ありぬ御神楽加持祝詞すこと此ほ
所化人勾殿乃西ハしこてあれ者あは
と内侍所乃まへ人ふ殿案内を引く案人
遊燎をしくを東乃座乃妙ふ西ふけ
里を漆乃江人うし紙よあり人長すを
ふをこ座をうふ東小座をしく人長

本末座ノウヘ也

雲圖抄詳也

〔江次第ニ云先唱高次名ヲ對面カヘ〕

採物〕○梁塵愚案抄採物歌注トリ物神以下皆手ニトル物也

○江次第云次人長起名オ男數人一一進奉仕畢人長退○又云人長起名オ男頭一人殿上人一兩人殿上名人地下名人等各一兩其人或至庭火前指退或追續

○江次第云人長立庭燎前行事次稱人人令起オ試本末皆起殿社起人長云主殿寮御火白仕礼又云掃部寮膳突給次云名御琴可仕者其人把和琴著膳突彈之人長云候本方郎著本方座上又云名御

うぐいすの御神楽
をしてこの次東小めを笹葉葉
をしてをうまれ乃ふ和琴乃ふ
てをうまれ乃人長おやをるふ
ふく笛和琴抑ふ
ふをしてをうまれ
ふをしてをうまれ
ふをしてをうまれ
ふをしてをうまれ
人長をうの抑ふ
てをる人長をうて
かう神をうをうを

江次第人長起舞

笛可仕者同上仰云候本方又云召篳篥可仕者同上仰云候末方又云召御歌可仕者同上仰云候本方又召一人同上候末方次仰云合天仕礼訖人長退次本末座勸盃各三獻頭以下取之藏人所瓶子次衛府名人著座次本末打拍子出歌先取物榊御幣等也及韓神人長起舞次盃酌一巡如前訖人長起召才男頭一人殿上人一兩人殿上名人地下名人等各一兩其人或至庭火前指退或追續人長兩三歩進上古多後人長或又有奉仕散樂之者訖佐

各座乃まへにすゑてさかなを
うけて薦まくらより才男歌ひて
うてゐまいる星は内(?)くはへのほりてさゝ　三首小前張内也
吉らて星三首をうたひて朝倉其駒などう　「吉々利々御錢子木綿作。」「江次第作薛駒」
こゝ常乃ごとし禄を給ふ此陰時乃御神
楽は秋の末に行はれ冬は陰時に行はれしを今
はとしごとに成ける乃内侍所也
御所は何とかや此時は星をおほせて
時御前にて御遊あれはせうて
禄をたまはりて御色役あり陰時御

弁涉利次星次朝倉陪從歌次其駒人長起舞云云々一二水記云才男

星　吉々利々本歌アカホシハ、レヤウ、ニヤウトアレハ星ト云ナヘシ

天照大神ノアマノイハトノ

古語拾遺云素戔嗚神奉為日神行甚無狀種種陵侮云々于時天照大神赫怒入于天石窟閉磐戸而幽居焉云々令天鈿女命以真辟葛為鬘以蘿葛為手繦以竹葉飫憩木葉為手草手持著鐸之矛而於石窟戸前覆誓槽挙庭燎巧作俳優相與歌舞

神楽しは猶すし事のそてはじまいし寺殿
よ遷御ありし此御神楽は一条院の御
時よりはじまる隔年に行はるゝ
るゝ事を永くこの事に成りにけり
寿永の乱によりて内侍所西海に渡御なりて
つゝ三年をへて事なくして都へかへ
り給し時は三ケ夜の御神楽ありき
さても神楽はおこして陰時に行はるゝ大きさ神
楽のおこりは天照太神のあまのいはとを
さしてこもり給し時諸神のいのりす

追儺○河海抄紅葉賀
除夜ニ儺ヲ追事也鬼や
らひトモ云追ノ字ヲヤラ
フトヨム也又難ノ一字ヲ
モ鬼ヤライトヨム也始自
禁中並ニ何ノ家ニ行之ツ

されバよ天鈿女命（アメノミコト）まさへ沢乃ろを
けらゝしてひげをとゝすきめ
てらしひまし庭火をたきしハしへ
まりしま御事なりまは我朝乃風俗
神代乃縁起によりてなりとしへや
百七十四 御贖物 卅日
六月小都かりし
百七十五 大祓 同日
是も六月に於く
百七十六 追儺（ツイナ） 卅日

方相氏○周禮夏官方
相氏掌蒙熊皮黄金四
目玄衣朱裳執戈揚盾
帥百隷而時難以索室
驅疫註方相猶言放想
今魌頭是也
四目アリテ○延喜式其
方相假面一頭黄金
四目

まふハけやらふ和うれハ大舎人（オホトネリ）寮鬼を
けらし陰陽寮祭文（サイモン）をよミて
小法きて舞をふ江小下是とおふ殿上
人も御殿乃方ちて桃乃弓あし乃
矢して以ら仙乃てゝ東庭
て游けに乃戸小いけこしも御おかけと
見ともは東庭細嗣豊盤原のさん於んぎ
つゝふ灯臺を浮すくきてしとされなら
追儺というハ年中乃疫氣をはらふ
鬼というハ方相（ハウサウ）氏（シ）の事なり四目ありて

[伺子トテ七人] ○延喜式伺子八人紺布衣八領

[内裏四門] ○延喜式方相首親王已下隨次入立中庭陰陽寮儺祭畢親王已下執桃弓葦箭桃杖儺出宮城四門東陽明門南朱雀門西殷富門北達智門

[慶安元年] ○類聚國史七十四文武天皇慶雲三年是年天下諸國疫疾百姓多死始作土牛大儺

○園觀應元年記於土御門殿被行追儺右兵兵衛督實音卿行之上卿不參云云

おそ行しけるに面とさくまふしてが
ゑ人形をそ廿人紺乃布衣
きてうものを卒して内裏乃四門とま
けるに慶安元年ふりまつる年
天下小百姓おほく疫癘ふなやあられ
しかなり

寫本奥書云

應永廿九年正月十二日書之畢

偏爲嬰兒也外見有憚　内大臣

一本奥書云

右根源抄依析營御所望俊成恩寺

關白　兼良公手時生年十九歟不被見一紙之書

被書進之云云

書千公事根源抄集釋

公事根源抄者所以記年中公事之根源也其本意取國史諸書令人知公事大要矣先是二三子從余求講說然世本多傳寫之謬余有所考是正文字亦引據諸書以明其義名曰集釋應二三子之望頃書肆村上氏欲鏤干梓余謂註義雖不詳爲幼學之助亦不爲不多古曰勿以善小而不爲此亦小利人之善乎遂以模印云爾

元祿七年六月廿六日　松下見林書

銅駝坊書肆平樂寺村上勘兵衛壽梓

松下見林書　七本松千立夏大雄寺